が，国により程度はまちまちであり，各国の認識・取り組みにも濃淡が見られる．議論の中で，国際人口移動により国内の高齢化が進み，ケアをする子どもがいないという問題，また海外で働いた後で貯金もなく戻ってきた高齢者が多い問題等，移民と関連した問題点がいくつかの国から提示されたのは印象的であった．また委員会の一環で，ハノイにある Bach Nien Thien Duc（百年天徳）ケアセンターという高齢者施設を訪問した．自然を生かし，空調も用いないという方針で設計された施設に，110人のお年寄りが暮らしていた．ハノイには現在12箇所しか高齢者施設がないということで，この施設も４年前に定員数を満たしてしまい，20名の待機者がいるという．ベトナムの高齢者数が増加するなか，家族介護の支援と平行して施設の整備も喫緊の課題となっている状況を目の当たりにした．

（林　玲子　記）

第12回社会保障国際論壇（大分）

第12回社会保障国際論壇（The 12th International Conference on Social Security）が，大分大学が開催校となって，９月10日から11日にかけて大分市で開催された．今回のテーマは「人口・家族の変容と社会保障」であった．この論壇（フォーラム）は，2005年に鄭功成教授（中国人民大学）の発案で日本社会政策学会国際委員会，韓国中央大学などの協力により始まり，以後，日本，中国，韓国の研究者が毎年持ち回りで行っており，今回は４年ぶりの日本での開催である．今回は基調講演のほか，テーマ別セッションとして「医療」，「年金」，「介護」，「社会保障一般」，「貧困と公的扶助」，「社会サービスと地域社会」，「家族の変容と社会保障」，「若手セッション」などで研究発表や議論が行われた．これらのセッションでは，医療，年金，介護といった人口高齢化に関係する社会保障に関する研究報告の他，家族の変容という人口に最も関係が深いセッションでの研究報告も行われた．日本，中国，韓国などから100名を超える参加者があった．当研究所からは２名が参加し，以下の報告を行った．

小島克久（国際関係部第二室長）「台湾における外国人介護労働者の現状―地域別に見た分析―」（社会サービスと地域社会）

是川　夕（人口動向研究部主任研究官）“A Socio-economic Status of Immigrant Women in the Gendered Migratory Processes; Are They "Double Disadvantaged" ?”（家族の変容と社会保障：英語セッション）

なお，次回の「社会保障国際論壇」は2017年９月に中国の南京で開催される予定である．

（小島克久　記）

第26回日本家族社会学会大会

第26回日本家族社会学会大会が2016年９月10～11日に早稲田大学戸山キャンパス（東京都新宿区）で開催された．大会は５つのテーマセッション，２つの国際セッション，９つの自由報告セッション，１つのラウンドテーブル，「専門家による家族介入の現在―家族を外側から支える実践―」と題する公開シンポジウムで構成され，各セッションと公開シンポジウムでは計68件の報告があった．

家族を標榜する学会の大会ということもあって，人口現象に関連した報告は多かった．例えば，テー

マセッションの１つである「人口集中する大都市圏の人口移動と単身世帯化―新宿区の人口・世帯動態と増加する壮年単身者の実態―」では新宿区の人口や世帯に関連する報告，自由報告セッションの「結婚」や「不妊と生殖補助医療」などでは人口再生産と関連する報告が行われた．

当研究所からも３件の報告があった．報告者とタイトルは下記の通りである．

釜野さおり「同性愛（者）に対する意識とジェンダー・家族に関する意識との関連性―2015年全国調査データを用いた分析―」

中村真理子・余田翔平「ライフコースをめぐる未婚女性の意識―「理想」と「予想」のギャップ―」

山内昌和「東京大都市圏に居住する夫婦の最終的な子ども数はなぜ少ないのか―第４回・第５回全国家庭動向調査を用いた人口学的検討―」

（山内昌和　記）

2016年ヨーロッパ歴史人口会議

2016年９月21日から24日までの４日間，ベルギー，ブリュッセル近郊のルーヴァンに所在するルーヴァン大学（Leuven University）において，ヨーロッパ歴史人口会議（2016 Conference of the European Society of Historical Demography）が開催された．これはヨーロッパ歴史人口学会（the European Society of Historical Demography）の主催であり，2014年イタリア，サルデーニャ島アルゲーロでの第１回会議に続く２回目の会議である．また開催国ベルギーは日本との友好150周年記念の年にあたることから，会議ではオープニングのセッションにおいて「極東に学ぶ：日本」と題したシンポジウムが行われ，日本から参加した黒須里美麗澤大学教授，津谷典子慶應義塾大学教授，金子隆一当研究所副所長による報告とルーヴァン大学ウィリー・ヴァンデウォール（Willy Vande Walle）教授との討論が行われた．これに続く３日間は，全体テーマを「革新のなかの歴史人口学：世界とヨーロッパ（Innovating historical demography: the world and Europe）」と銘打ち，41の個別テーマセッションと４つの全体セッションにおいて各国の研究者から最新の研究成果報告がなされるとともに，活発な議論が行われた．その内容は従来の歴史人口的方法論（家族復元法など）に基づく研究成果から，事象歴分析の最新技術の応用による研究成果紹介まで幅広く，とりわけライフイベントの歴史的変化の解釈に対する進化生物学的視点の導入といったテーマを全体セッションで討議するなど，歴史人口学の刷新への機運を感じさせる会議となった．なお，本会議をホストし，日本に関するセッションを企画したルーヴァン大学社会学研究センター（Center for Sociological Research）のコーン・マシューズ（Koen Matthijs）教授，松尾英子博士にはご尽力に対してこの場を借りて感謝申し上げたい．会議の詳細はウェッブページを参照のこと（ http://eshd2016.eshd.eu/ ）．

（金子隆一　記）

2016年日本地理学会秋季学術大会

2016年日本地理学会秋季学術大会が2016年９月30～10月２日（２日は巡検のみ）に東北大学川内北キャンパス（宮城県仙台市）において開催された．一般発表114件，ポスター発表46件のほか，４つのシンポジウムで21件の発表があり，その他に地理教育に関する公開講座「ESD と地理教育の未来」，６回目となった高校生ポスターセッション（20件の報告）も実施された．地域人口に関する報告も多